

# 1. ガイダンス—民衆史研究という方法

2025. 4.10. 大橋 幸泰

はじめに

**歴史研究の方法／史料をもとに事実を見極め、その意味を考える**

→しかし、史料・事実・意味のどれもが自明のことではない／観察者の立場によって可変的／そもそも過去の  
事実は無数／歴史研究はその一部を切り取る行為／史料・事実・意味の選択そのものに恣意性がつきまとう

→歴史学に、客観性は望めないのか

\*だからといって、すべてが相対的なものであるとの思考方法では、歴史学は学問ではないという開き直り  
／客観的に歴史を見ることができ、かつ総合的に歴史を認識する方法はないか

→民衆史研究という方法の有効性を考える

## 1. 歴史学における民衆という語

(1) 一般語としての民衆の登場

20C 初め、大正デモクラシーの時期／「特権階級」に対する「一般民衆」

\*「認識の次元での「民衆」の独立化と価値化を示し、「既成の支配層を、一にぎりに過ぎない存在として  
浮かび上がらせる役割」を果たす(鹿野政直『近代日本思想案内』岩波書店[岩波文庫]、1999年)

→ただし、戦前・戦後直後期の歴史学では、被治者を指す語として、民族・人民・大衆の語を多用

\*たとえば、マルクス主義歴史学を基盤とした社会構成体史・階級闘争史など

(2) 民衆史研究の登場と定着

1960 代、二つの研究潮流

### a. 民衆思想史研究

1960代、歴史における主体者としての民衆像の登場／色川大吉・安丸良夫・鹿野政直らの民衆思想史研究が契機／マルクス主義歴史学に対する違和感を起点

\*民衆とは「生活の専門家」(安丸良夫)／民衆：生活者を意識する語

\*しかし、突然現れたのではない／被治者を分析対象とする歴史研究の基盤形成は戦前から存在／たとえば、  
吉田東伍の社会経済史・地域史研究、津田左右吉の平民思想史研究、西岡虎之助の民衆生活史研究

### b. 人民闘争史研究

1960代後から1970代前、歴史学界において人民闘争史研究が台頭

(深谷克己「人民闘争史研究」という歴史学運動』『歴史学研究』921、2014年)

\*歴史学研究会・日本史研究会・歴史科学協議会・東京歴史科学研究会など、在野の研究会が中心

→「大学紛争・教科書検定・明治百年祭・建国記念日・沖縄返還・近代化論・農業衰退(過疎)・都市化(過密)・公害  
などによって揺さぶられる社会状況を、「独占資本主義段階の国家権力」からの攻撃ととらえ、「主体」  
論に重心を置く歴史認識で対応」／歴史の変革主体を「人民」に見ようとした

\*「人民」とは、労働者・農民・市民の幅広い統一戦線／戦後社会に残存する封建的要素(封建遺制)をいかに  
克服するかという問題意識が人民闘争史研究を下支え

→しかし、高度経済成長を経た 1970 代半ば以降、人々の課題意識は「反封建」から「反既成」へ

1970 代後以降、人民闘争史研究の後退とともに、被治者を指す語として、変革主体イメージの強い「人民」  
から、生活の概念を強く意識する「民衆」へ、定着

→思想史に限定せず、被治者の世界を幅広く検討／民衆思想史研究は民衆史研究へバージョンアップ

\*人民闘争史の「人民」と民衆史の「民衆」は同じではない

## 2. 民衆史と社会史

1970 代、既存の歴史学に対する批判から、社会史が登場／日本史では中世史の網野善彦が牽引

\* 社会史の特徴

a. マルクス主義による社会構成体史で基本階級からこぼれ落ちるマイノリティーや、些末なものとして捨象されてきた日常的事実に注目

b. 短期に変化する政治史・事件史の時間軸とは別の、長期持続する複数の時間軸を想定

c. 政治史で設定される枠組み(典型的なのが国民国家)を越えた、生活の空間を想定

→ 時系列的認識への疑義／発展・先進・後進の発想はない／それまで規範とされてきた西洋近代を相対化

→ 時代区分の相対化／歴史学を根底から揺さぶる

\* しかし、弱点も存在

① 時系列的認識の希薄化／時間軸の意味が曖昧

② あらゆるものを相対化／軸足の喪失

→ 社会史だけでは、国家史・政治史を含めた通史を描けない

1970～80 代、社会史研究の隆盛／「民衆史から社会史へ」か、「民衆史と社会史」か、という問い

→ もし、社会史が民衆史の中の生活史の肥大化であるとすれば、社会史の弱点を補う必要／民衆史の可能性

→ 民衆史は、民衆の対極にある国家史・政治史まで射程に入る／総合史を志向

\* たとえば、安丸良夫の通俗道徳論、深谷克己の百姓成立論

おわりに

民衆概念／生活を基盤に被治者全般を統括するターム／民衆とは「生活の専門家」(安丸良夫)

\* 生活はあらゆる属性を通貫する人々の営み

→ 生活を基盤に物事を見れば、それが客観的になるのではないか

### 【参考文献】

民衆史研究会編『民衆史を考える』(校倉書房、1988 年)

須田努『アイコンの崩壊まで「戦後歴史学」と運動史研究』(青木書店、2008 年)

大橋幸泰著『近世日本邪正論 江戸時代の秩序維持と隠れ／隠し念仏』(勉誠社、2024 年)

### 【付記】

・明日までに、Hoppiiie にて講義記録の提出を求める。